[曲 名] Sulla Piana della Melia

メリアの平原にて

[曲 種] sinfonia

[作曲者] Giuseppe Manente

ジュゼッペ・マネンテ

[整曲者] Jiro Nakano

中野二郎

作者は1867年2月2日イタリアのサンニオ(Sannio、イタリア旧地名でLazioの東にあり、
Campobasso, Benevento, Avellinoの各県を含む地帯)のモルコーネ(Morcone)に生まれ、
1941年5月17日ローマに逝いたイタリアの作曲家。
音楽家を父として生まれ、王立陸軍学校付属の軍学学校に入り、
ナポリにあってはガゥティ、グァールロ、デ・ナルディス(De Nardis 1857-1951),
ローマにあってはデ・サンクティス(De Sanctis Cesare 1824-1951)に師事、
抜群の成績を以て卒業するや歩兵第60聯隊軍楽隊長を拝命した。
この頃(1896年)吹奏楽「交響的間奏曲」序曲「今と昔」を発表したが、
1908年頃迄の作品には出版に当たって凡て作品番号を附していないので極めて難しいが、
処女作ではなく既に相当量の作品があったことが推察される。
1903年に歩兵第3聯帯に配属ここの軍楽楽長となり吹奏楽「降誕祭の夜」序曲「国境なし」の力作を発表、
特に三楽章に亘る幻想曲「華燭の祭典」はイタリアの著名な作曲家ボルゾーニ(+1919)、
テュエク、ウォルフ・フェラーリ(+1948)等の賞讃を得た。
折しもイタリアは全土を挙げてマンドリン音楽の興隆時代で彼も多大の関心を寄せ、
マンドリナータ、我が星へ、プレットロに寄せて等を書き、
ボローニアで発刊されたVita Mandolinistica誌、ミラノのIl plettro誌に発表した。

特に四楽章に亘る交響曲「マンドリン芸術」は「古典的形式に依る交響楽」とも呼ばれ
マンドリン楽では至宝のものでジェノヴァのシヴォリ(Sivori)音楽院主催の作曲コンクールに於いて受賞した。
本曲はジェノヴァのL Arte Mandolinistica誌で出版を見たが、
後パリーのレステュディアンティナ誌が版権を譲り受け、うち第二楽章のみの出版に終わった。
1908年イル・プレットロ誌主催の作曲コンクールには三楽章の幻想曲「秋の夕暮」が入賞、
未だに広く愛奏されている。
本曲の訳名は「晩秋」で馴染まれているが、二つとも故武井氏の訳名で初め秋の夕暮、
後に晩秋と改められたものであるが、稍穿ちすぎた武井氏好みで私は素直に秋の夕暮でよいと思う。
1909年には擲弾兵団附軍楽長となり、前記イル・プレットロ主催の第二回作曲コンクールには
序曲「メリアの平原に立ちて」が受賞翌1910年出版を見るや忽ち斯楽界の至宝作品となった。
本曲はその翌年吹奏楽として作者自身によって編曲され出版を見た。
それには明らかにイル・プレットロ誌の第二回作曲コンクールに受賞した旨が記載されてある。
マンドリン合奏の総譜には作品番号が附されていないが、吹奏楽スコアには之がOP123となっている。
其他細部に亘って検討すると速度記号の指示か細くなり音の訂正、小節のカット、表情記号の追加がある。
1912年にはピストイヤの歩兵第85聯隊附を歴任。
欧州第一次大戦起こって1915年イタリアがその禍中に投じ、
兵を国境に進めるや彼も又之に従い身を挺して祖国を守る若人の為にイ短調の序曲「小英雄」を作曲、
功によってCavaliereに叙せられた。
1918年には勇敢な擲弾兵団附吹奏楽団をひきいて米国に派遣され、戦勝記念演奏会を北米の各地に開いた。
この時の所産が『アゾレス諸島より』(大西洋の真中にある常春の楽園ポルトガル領)
『ニューヨーク』『ピッツフィールド』『アメリカ印象』等彼地の名をとった作品がある。
この年パリー、ロンドン、ブリュッセルに開かれた戦勝記念祭典にも参加して成功を収めたが、
特にローマから招待されてコロンナ広場に催された歩兵第83聯隊吹奏楽団の演奏会は
記念すべき又歴史的なものであったという。
上記の如く彼は特にイタリアの吹奏楽界で著名で且つ音楽を一般化した人として敬愛されていたが、
マンドリン音楽のよき理解者として数多の芸術的作品が熱愛されている。

作品の中にはかのPuccini(+1924)、Mascagni(+1945)、Franchetti(+1942)、Leoncavallo(+1919)等からも賞讃を得たものが少なくない。

1921年秋には聘せられて挨及ケディヴェに赴き、国王ファド・パシャの宮廷附楽団の指揮者を拝命、Verdi、Bellini、Mancinelli、Mascagni、Ponchieri等の作品を演奏し

殊にマスカーニの「太陽への讃歌」の如きは国王お気に入りの曲になったと云う。

「カイロの思い出」「エジプトのアレッサンドリア」等ここでも彼地の名をとった一連の作品がある。

第一次大戦後外国からも幾多の叙勲を受け、1924年には名誉あるMaurizioとLazzaroの十字勲章を授けられた。

1925年から1933年までイタリア国家財務省守備隊の楽長をつとめ、この間の作品が非常に多い。

皇子の結婚に当っては「倖せな結婚」王女の誕生に当っては「子守唄」

フランス大統領ルーベのローマ訪問に敬意を表した行進曲、

ヴェルディ、プッチーニ其他著名楽人の死に当っての追悼曲、勇敢な擲弾兵士の戦死に寄せる悲歌、

マンドリン音楽の最大の擁護者であったマルゲリータ皇太后の追憶、等ことある毎に作品は生まれた。

彼の最後の作品はOP, 446で、「白鳥の楽園」と題する三幕のオペレッタで興味深く非常に美しい。

之は間もなく特に優れた断片を作者自身によりマンドリン四重奏に編曲出版された。

私は死の前年即ち1940年に文通し、最後の作品のボーカルスコア及その編曲と数多の自筆マンドリン楽譜を贈られた。

其頃から第二次大戦に入り文通が途絶えマネンテの死を知ったのは近々数年前のことである。

以上は大体のマネンテの経歴であるが記録が甚だ少なく、

僅かにイル・プレットロ誌(1941年)の計報と作品を蒐集して、楽譜に記されたものから作り上げたものである。

私は単に吹奏楽として埋もれるには惜しまれるものが数多あり、

既にこのうちから「華燭の祭典」「今と昔」「交響的間奏曲」「愉快な仲間」「誕生祝」

「サンニオの思い出」「序曲」をマンドリンオーケストラに移し同志社大学マンドリンクラブで初演した。

本曲「メリアの平原に立ちて」は1909年斯楽誌イル・プレットロが第二回作曲コンクールを開催した時提出して

第二位に当選し一等名誉賞状を授与されたものでプレクトラム楽器を大胆に取扱った点に彼の非凡なる手腕を見ることが出来る。

特に第二主題に於ける第一マンドリンの旋律と第二マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ、ギター等の
交互に現れる和音の伴奏は最注目に値し、更に主題がマンドラに対照され
終に第一マンドリン、マンドラが同時に対位旋律を繰返すことによって驚くべき効果を示している。
この時の第一位受賞はアメデオ・アマディの「海の組曲」であったが
、革新的な豪放な作品としてこの「メリアの平原に立ちて」は他作家の作品に見ることの出来ぬ気概と力とを持っている。
1934年(昭和9年)武井守成氏はその誌「マンドリンギター研究」四月号に「序楽メリアの平原に立ちて」の
演奏上の解釈として執筆しているので紹介する。

冒頭Allegro conbrioは二分音符が144程度、但し私は160位に振ることもある。
第二小節のPはその前がfである為に明確に表現し憎いので注意を要する。
此場合はfで斉奏するDの切れ目を明らかにすれは足りる。
第5小節と13小節とで1にはマルカートかつけられ他はつけられていないが之は略されたものである。
第21、22小節(1の前二小節)の如く其以前がトレモロで弾かれている後のスタッカートは兎角に急ぎ勝ちになり易い。
之もプレクトラム楽器の習性とでも云うべきであろう。
1から13小節目以降に於けるギター、マンドロンチエロの動きは明確に作家の意図を伝えねばならない。
此の場合初めの八分音符につけられたスタッカートの記号及その後の八分音符間に於ける休止符の存在を忘れてはならない。
3から初まる第一マンドリンの旋律の美しさから此部分が遅くなり勝ちである。
此部分 a tempoと記されてはいるが勿論多少の相違は認められる。
即ち私としては二分音符を126程度にとる。
けれども兎角延び勝ちで場合によってはAndante にさえなった例を見るがそれは甚だしい誤りである。
マンドラ及第二マンドリンの和音の演奏は多少Arpeggioに奏かれるのは当然であるが、
あまり極端にアルペジャートにすることは面白くない。
4に入れは当然テムポは前にかえる。けれども元来3の部分を左程遅くしていないのであるから
4に入って急に早くなった様に感ずるのは矢張り3が延びている証拠である。

5の前の小節は総譜に於いてはCrescendoはつけられていないが、之はつけられているものと見てよい。

5以後のギター以下の動きは明らかなるを要する。

従ってffの中にも強奏せねばならない。

8分の6拍子Andante Sostenutoは八分音符を120程度。

勿論作家の指定された通り此部分は6拍に振る。

転調した後はマンドラに旋律が移り第一マンドリンはオブリガートにかわるが、

第一マントリン奏者が之を自覚しない場合があるから注意せねばならない。

ギター以下に第一小節のみスタッカートをつけられているが之は後を省略したに外ならない。

6に入ってギターは全奏者が恰も一人の如く此分割和弦の演奏を効果あらしめなければならない。

6から8小節を過ぎて1゜Tempoに入るが之から7までの間は二分音符若しくは附点四分音符を除いて他はスタッカートで奏する。

尤も之前にも以後にも特に記号は附せられていないがスタッカートで奏かねばならぬ個所は少くないが、

茲（ここ）には其標準を示す意味に於いて述べて置く。

7からAまでの間は前との対照から云っても極めて繊細なトレモロで明らかにトレモロを示さなければならない。

AからBまでは譜に示された通り8の三小節より以後に繰返される部分であるが、斯うした記譜上の便法は感心しない。

尚此部分のマンドラの旋律は美しい極みでマネンテの性格の最明らかに現われた部分である。

9から10までの間は一見極めて平凡な為に却って表現の困難を感ずる。

指揮者の頭脳的成否の分れるところであろう。

10から8小節目のマンドロンチエロのF音にはシャープが落ちている。

10を過ぎてから1゜tempo に入って此曲の所謂山である第一マンドリンとマンドラとが前の旋律を対位的に奏する部分が来る。

此部分もテムポが延び勝ちであるから注意しなければならない。

第二マンドリンのアルベジョの伴奏は全員を奏法上一致せしむる点に困難があり

而も之が成否は大局の大影響を与えるから大に努める必要かある。

対位的の二つの旋律(それは前にも云った様に第一マンドリンとマンドラとに現われる)は演奏

上・・・・・・と云うよりは
むしろ表現の上に特別の技巧を要すものであるが之は到底筆で現し難いものであるから指揮者なり奏者なりの研究にまつの外はない。
14から以後のVivaceは出来るだけ早い方が勿論効果的であるがそれは整然さを欠かない程度に於いてでなければならない。
総じて此序楽は曲として特に難解な点はないが、表現上には決して容易なものでないことを特に附加えておく。
題名 Sulla piana della Meliaを「メリアの平原に立ちて」と訳したのは私自身(武井守成)であるが
「メリアの平原にて」と直訳しても敢て差支えはない訳である。

以上は武井氏の文であるが其の後作者マネンテが大編成の吹奏楽に編曲したものには各所に改訂が加えられ、
細い指示が与えられているので之と対照して見ることは非常に興味深い。
冒頭のAllegro con brioが武井氏は二分音符を144程度、時に160位に振るとあるが、作者は116と指示し随分開きがある。
以後武井氏の解釈は大方の合奏団の踏襲するところとなっているが、3の個所で126程度に落とすことは原総譜には指示されていない。
つまり作者としては最初の116を其儀持ち越せばよいので、従って4から又元の速度に返えることは作者の意図しなかったことである。
私はかつてモオツァルトの歌劇「フィガロの結婚」序曲を3分40秒で振ることを得意然と語った日本人指揮者を知っているが、
ウィーンの管弦楽をヒンデミットが実演してそのおっとりとした速度に驚いたことがある。
人間はどうも最初に印象づけられたものが恰も正しいものの様に錯覚し易いが、
本曲に在っても作者の意図に就いては慎重に留意しなければならない。
音そのものの変更は余り沢山はないが表現上の指示が非常に細くなり丁寧になっている。
3から現われるギター、マンドラ、第二マンドリンに亘るアルペジョがギター、マンドラがスタッカートで
第二マンドリンのみがテヌートになっていることは注目すべきことである。

5以下の低音のスタッカートとアクセントの場所も注目したい。

8分の6拍子に入っての速度は武井氏の指示通りに作者も書加えてあり、武井氏が適確に捉えたことに感歎する。

149小節の第一マンドリンのビツィカートはプレットロ版は誤りで第三拍はEフラットでなければならない。

更にハ長調8分の6拍子の旋律の表現に対する指示か丁寧になっている。

191小節から192小節に亘って第一、第二マンドリンに音が流れ込まねばならない。

此処からギターと第一第二マンドリンに受け継がれる分散和弦が大幅に改訂された所で、この方が遥かに面白い。

この部分ではプレットロ版では随分音の誤りがある。

238、及240小節の低音の動き、245、247小節の低音のリズムが変更され、

最も器楽的な技巧かこらされた277小節のギター及び第二マンドリンの改訂に注目されたい。

14以降の繰返の部分で二小節削除され、268小節から、4小節間の和音の設定が変更されている。

Il Plettro出版のSulla Piana della Meliaスコアの誤り、

及ひ其後に作者Manenteにより吹奏楽に編曲せられたスコアからの改訂箇所を列記する。

以下小節数は中野二郎により整曲せられたマンドリンオーケストラスコアによる。

頁	小節数	元Plettro版	書加えられたもの
1			op. 123
〃			(二分音符=116)
〃	1	f	ff
〃	9	f	ff
2	13		＞ ＞
〃	22	f	sf
〃	23-24	全音符	第二マンドリンがシンコペーション
〃	23-26		マンドラ以下低音二分音符に＞
〃	25-26		1, 2M, M1に ＞
〃	25	F	2M, D

〃　26　　2M, div

3　28-30　　＞及びスラー、スタッカート

〃　30-31　　ギター

〃　36及38　　マンドラ以下＞

4　44　f　　sf

〃　45-52　　＞

〃　53-54　四分音符　　八分音符

5　57-58　〃　〃

〃　63-66　　スラー

6　69　　pp

〃　69-70　　第一マンドリン div

〃　71以下　　マンドラ以下スタッカート

〃　72以下　　第二マンドリン テヌート

7　86　　mf

7　88　Si フラット　Siナテュラル

〃　90　　p

〃　92　Siフラット　Siナテュラル

9　116　　＞

9-10　126-132　　・及＞

10　131-132　　poco rit

〃　133　　(八分音符=120)

〃　134　　espress

11　144　　マンドラ

〃　149　　1M, Mc, Chitarra音訂正

〃　151　　Con anima

〃　152-158　　Cresc. Decresc.の在り方

12　159-160　四分音符　　八分音符

〃　165-179　　＞及スラー

14　189-191　Decrescent　Cresc.　Decresc.

〃　192　休　1M=D

2M=Eフラット

〃　192　ben cantato

〃　193-195　Crescent

〃　197　Decrescent

〃　192-229　ギター 改訂

〃　196　Eフラット　低音 Bフラット

15　208　C　低音 F

〃　207　E　1M, 2M　Eフラット

〃　213　E　1M, 2M　Eフラット

〃　210-212　Cresc. Decresc.

〃　214-215　Decresc.

16　230　Con fuoco

16-17　230-237　＞及・

17　238　低音の動き

〃　〃　Siフラット　Si ナテュラル(ギター)

〃　245及247　低音リズム

18　248-249　四分音符　八分音符

〃　250-268　＞及・

〃　252-253　Cresc.

〃　256-257　Cresc.

19　269　チェロ F　F シャープ

20　281, 282, 287, 288, 289,　第二マンドリン

290, 295, 296, 305, 306　アルペジョ改訂

311, 312, 313, 314

19-20　279―282　Cresc. Decresc. マンドラ

20　284-285　Cresc. Decresc. 第一マンドリン

21　295　G　低音D

〃　299-300　DEcres. マンドラ

19-22　277-314　ギター全面的改訂

22　315-327　＞及・

23　328　ff

〃　332　＞

24　349　f　sf

〃　350-359　＞

25　レピート間10小節を2小節削除(後より3,4 小節)して8小節とする

〃　368-371　和音改訂

26　372　pp

〃　372-375　Cresc.

マンドローネ、キタローネ、及打楽器は全部書加えられたもの。

Tamburoはサイド・ドラム小太鼓。

猶本曲はコンクールに提出された時は「最後の到着」(原名不詳)と題された後に表題の通り改められたと武井氏は書いている。

菅原明朗氏は又「メリアと云う語は樹木の一種とあるが他の語は見当らず又冠詞から考えても個有名詞ではない。

そこで北イタリアがかつてフランスに統治されていたことを考えるにフランス語からイタリア語に変化した言葉があるかも解らないと推察、

日仏大辞典にて調べたところ軍隊用語で「Piana de11a Melia」「最後に来る者」との熟語訳があった。

軍隊の最後に続くのは軍楽隊であり、その軍楽隊の最後に入るべき所それは戦場である。

ここから「野戦場にて」と訳した。と云う説を立てていられる。

之は神戸の川口優和君を通じて菅原明朗氏から教示を受けたもの。

私は又イタリア百科辞典にMelia を発見。

之によるとMe1iaは紀元前 700年頃Micale(小アジア)の近郊にあったイオニアの古い町の名で其頃度々の戦乱で失われた町の一つ。

従って私としては適確に断定することは出来ないが、奇しくも戦に関係あることは間違いないようであ

る。

1970年1月20日発行

イタリアマンドリン百曲選第三集より

〔注 釈〕

この「メリアの平原にて」中野二郎整曲版は要約すればマネンテがマンドリンオーケストラのために書かれたものを、
マネンテ自ら吹奏楽譜に書き改め出版された楽譜に基づいて、中野氏がさらにマンドリン楽譜に直したもの。
その際吹奏楽譜の改訂された部分を全てマンドリン譜に付け加えたものである。
各地で演奏されるプログラム、過去の演奏記録に〈中野二郎編曲〉と書かれて紹介されているが、
これは間違いで、中野二郎氏による、音の手はいっさい加わってない。
変更された部分は全てマネンテの意図して改訂された部分である。

従って、この曲は〈編曲〉でなく、《整曲》と改めていただきたい。

また、メリアの語源についてはその後ＳＭＤの元指揮者岡村氏が現地調査に赴いて判明したので、
岡村氏の調査記録を中野氏が書かれていますので、追記させていただきます。（石田記）

〔メリアの語源について〕

マネンテが、「華燭の祭典」、「降誕祭の夜」、「国境なし」、等の佳曲を書いたのは、
歩兵第３連隊所属の軍学学長時代で（1903年から1908年）、
メリアがコンクールに入賞出版された時点では既に他の連隊に所属し、軍学学長に就任している。
マネンテの所属していた連隊が、或時期に連隊ごとイタリアの最南端の Reggio di Calabria に移り、当然マネンテも移住した。
此処は地中海とシチリア島を望む風光絶景の地で、何世紀もの以前にはギリシャの植民地であった所。
その辺りの住民は、今でもその目鼻立ちで一見ギリシャ系とわかるほどであったと云う。
そこから少し離れた高台に何と、Piana della Melia が歴として存在していたと云うのである。
此処はその頃軍隊の演習地で、当然マネンテも屡（しばしば）足を運んだに違いない所だという。
この地名は詳細な地図には載ってる由で、恐らく住民の祖先が故国を偲んで名付けたものであろう。
曲想との関連を想うと激しい戦いもさることながら、対処的な清澄優婉な旋律の所似と納得出来るのである。
つまり、軍隊の戦闘訓練と風光絶景の地が交々作者の忘れ難い印象となって、本曲が構成されたと見るのは極めて妥当ではないだろうか。
岡村君はヒントをマネンテの嗣子ウーゴ氏の話から得て、実地に赴いて確かめた調査で、これまでの疑問が初めて氷解したのを喜びたい。